

## 場所の記憶／全祖望の記録

—あらゆる場所に歴史は降り積もり、やがて発酵して文化になる。場所こそが文化を蓄積させる器なのだ。「場所に聞く」とは、場所の中に封じ込められているあらゆる歴史と文化を再び解き放つ試みなのだ(1)。

早坂俊廣

全祖望(一七〇五—一七五五、字は紹衣、号は謝山、鄞県の人)は、歴史研究のデータベースとなり得る史資料を多く

残し、それらは現在においても利用され続けている。その中でも、明清交替期に関わる史資料の収集・整理が特に有名であるが、思想史研究の一環として著される本稿では、書院や蔵書楼といった文化地点に関する全祖望の記録に着目してみたい。「独創性」が一つの指標となる思想史研究で全祖望が大きく扱われることは(とりわけ日本においては)多くない。彼は確かに「継承者」であり「整理者」であり「記録者」であった。だが、『宋元学案』の増補修訂(2)という作業一つを取ってみても、その功績(後世の思想史観に与えた影響)を無視することはできない。浙東、特に寧波地域出身の思想家に関しては、全祖望の熱心な記録／顕彰の営みが無

ければ、彼らの多くが現今のような形で思想史の中に位置づけられることはなかつたであろう。このような点を鑑みると、全祖望の記録の特性について明らかにしておくことは、極めて有益なことであると思われる。書院や蔵書楼に関する全祖望の記録を検討することを通じて、その記録の特性を明らかにし、「思想史」の構築という問題について再考する一助としたい。

書院や蔵書楼といった具体的な場所に着目するのには、もう一つ理由がある。人は、具体的な場所のなかでしか生を営むことはできない。冒頭に掲げた文章の表現を借りるならば、その場所には様々な歴史と文化が封じ込められている。ここではそれを「場所の記憶」と言い換えたのだが、そのような「場所の記憶」に触発されて、人の生は様々な彩りを帯びていくこととなる。ここでは、思想家・全祖望において、どのような「場所の記憶」との出会いがあったのか、そしてその出会いを通じて全祖望の言説にどのような彩りが添えられることになったのか、このような問題を考えてみたい。それは、地縁血縁を核とした人的結合を重んじる中国社

会を分析するうえで、さらには、寧波地域に対する場所愛（「Topophilia」(3)）に満ちあふれた全祖望という個性を分析するうえで有効な視点である。

この点に関連して、もう一点だけ付け加えておきたい。全祖望の思想が注目される思想史研究の領域として、「浙東學術史」「浙東学派」研究がある。様々な論者が様々な議論を（特に大陸・台湾で）展開している注目すべき研究領域ではあるが、「全祖望という枠組み」から自由になった研究、全祖望の問題意識の水準を超えた研究は思ひのほか少ないように感じられてならない。始めから「浙東」という枠組みを所与の前提にしてしまっているがために、「浙東」という場所の気風が本当に感じられるものが逆に少ないという点も、問題である（4）。そのような研究状況を克服するためにも、寧波という具体的な「場所の記憶」、それに関する「全祖望の記録」を検討しておくことが不可欠なのである。

### 一 天一閣に万卷楼を見る

全祖望の「天一閣藏書記」という文章は、実に不思議な文章である。鄞県の人・全祖望が、地元にある国内屈指の蔵書楼について記した文章であるからには、恐らくその偉大さについて口を極めて顕彰しているのではないかと予想して読むのが人情であろう。しかし、その予想は全く裏切られる。ここでは、天一閣主人の范氏について積極的に語られることはなく、別の一族の歴史が延々と語られている。考えようによっては、不思議というよりはむしろ失礼と称すべき文章であ

る。

この文章の冒頭で、全祖望は、天一閣に関する黄宗義の文章に言及し、自分がそれに何を付け加えることができようかと謙遜する。だが、この通り一遍な遜辞の後で、彼は、ある一族の歴史について語り出す。

ただ、この楼閣は明の嘉靖年間から始まっているけれども、楼閣中の書籍は嘉靖からのものではなく、もともとは城西豊氏の万卷楼の旧物である。豊氏は清敏公の後裔である。わが郷里における「南宋四姓」の一つであるが、名声・人徳の点で豊氏はその最たるものである。……豊氏は清敏公より後も、代々、名声ある人が続出したので、書籍収集の多きでもまた並ぶものがなかった。豊熙の子である豊坊（5）が晩年に心の病を患い、書籍と墨蹟の世界に耽溺しているうちに、その家産のほとんどを使い果たしてしまい、楼上の書籍も、宋版や写本のたぐいは門生たちによって六割がた盗み取られてしまった。後には大火にも遭い、そのほとんどが失われてしまった。

（天一閣主人である）侍郎の范欽氏はもともと書籍の購入が好きであり、かつて豊坊のところから書籍を鈔写し、また（彼に）蔵書記を執筆してくれるよう求めたことがあった。事ここに至って、幸いにも残った（豊氏の蔵書の）余りは天一閣に帰することとなった。さらに、少しばかり王世貞と交換で鈔書を行って蔵書を増やしたので、豊氏の旧觀を取り戻すことはできていないけれど

も、それでも浙東地方の雄たり得たのである。……〔但  
是閣肇始於明嘉靖間、而閣中之書不自嘉靖始、固城西豐  
氏萬卷樓舊物也。豐氏爲清敏公之裔、吾鄉南宋四姓之  
一、而名德以豐爲最。……豐氏自清敏後、代有聞人、故  
其聚書之多亦莫與比。迨熙子道生晚得心疾、潦倒於書淫  
墨癖之中、喪失其家殆盡、而樓上之書、凡宋槧與寫本、  
爲門生輩竊去者幾十之六。其後又遭大火、所存無幾。范  
侍郎欽素好購書、先時嘗從道生鈔書、且求其作藏書記。  
至是以其幸存之餘、歸於是閣。又稍從弇州互鈔以增益  
之、雖未能復豐氏之舊、然亦雄視浙東焉。……「天一閣  
藏書記」、「鮑埼亭集」外編卷一七 \* 以下、全祖望の引  
用はすべて『鮑埼亭集』に拠り、編名・卷数のみを記す  
こととする。『鮑埼亭集』は、国立編訳館から出版され  
た詹海雲校注本を使用した。〕

「南宋四姓」とは、史浩らの流れを汲む史氏、鄭清之を輩出  
した鄭氏、樓鑰らの流れを汲む樓氏、そして「清敏公」こと  
豐稷（一〇三三〜一一〇七、北宋時代に宰相を務めた）の後  
裔たる豊氏のことである。これらの一族は、南宋以来、絶え  
ることなく多くの人材を輩出し続けた、寧波地域を代表する  
名族である（とみなされる）。その中でも卓越した存在で  
あった豊氏の蔵書の、幸いに残った書籍を引き継ぐことで  
「以其幸存之餘、歸於是閣」、天一閣は浙東にその名をとどろ  
かせることとなる（6）。もちろん、万卷樓の以前の勢いには、  
およそ届いていないのだけれども（雖未能復豐氏之舊）。先  
に、全祖望のこの蔵書記を「不思議というよりはむしろ失礼

と称すべき文章」と評したが、これらの表現を目にした范氏  
の心情はさぞや複雑なものであったろう。

全祖望が、天一閣の蔵書と城西豊氏万卷樓との因縁を強調  
するのは、この蔵書記だけではない。彼は「天一閣碑目記」  
（外編卷一七）という文章においても、「侍郎の范欽氏が金石  
を愛好するのは、思うに豊氏から引き継いだ風習である（范  
侍郎之喜金石、蓋亦豐氏之餘風）」と述べている。「舊物」と  
いい、「餘風」といい、「雖未能復豐氏之舊、然亦雄視浙東  
焉」という。まるで彼の興味関心の所在は、現存する「范氏  
天一閣」には全くなく、今は無き「豊氏万卷樓」にのみ注が  
れているかの如くである。全祖望は何故、このような「記  
録」の残し方を選んだのであろうか？

理由を説明するてがかりの一端は、全祖望が、黄宗羲の文  
章「天一閣蔵書記」（中華書局『黄梨洲文集』四〇〇頁）と  
同じ題名の文章をものしたという事実に見いだせるであろ  
う。黄宗羲の「天一閣蔵書記」は、江南地方の蔵書史を知る  
上でも、黄宗羲の学問のあり方を知る上でも、格好の資料で  
ある。全祖望は、自ら語っているようにこの文章をふまえ、  
引き継いでいる。そして、この文章が語っていない事項、つ  
まり「范氏天一閣の蔵書のほとんどが豊氏万卷樓の旧物であ  
る」ことに焦点を絞って詳述したわけである。

ただし、それは、不足していた事実を「補足」とするとい  
う以上に大きな意味を、少なくとも全祖望にとつては有してい  
たはずである。例えば、次の文章を見ていただきたい。

甬上「寧波」における学問の正統は、慶曆五先生から

始まる。その時、豊稷氏は（五先生の一人である）樓郁から學問を授かり、王説の学友であつた。（寧波における學統は）淳熙四先生のときに再び盛んになる。その時、（豊稷の四世孫の）豊有俊氏は（四先生のメンバーである）楊簡・袁燮よりも少し後の世代ではあつたけれども、朱氏・陸氏の間で同じく講學した仲である。明代の嘉靖年間には、張邦奇が學問を論じ、新建・増城（つまり王守仁・湛若水）の偏向ぶりをかなり修正したが、その時、豊熙氏は同調者であつた。世間の人は、「甬上四大姓」が、朝廷の高位高官に登りつめる者を多く輩出したこと、豊氏もその一つであることは知っているけれども、三百年の（甬上の）學問の正統が連綿と続いていた中で、豊氏が必ずそこに関与していたことを知らない。何とも盛んなことである。「甬上學統、肇開於慶曆五先生。時則豐清敏公受業於正議樓公、而桃源之友也。再盛於淳熙四先生。時則豐制使公宅之於楊袁、雖稍晚出、而同講學於朱陸之間者也。及明嘉靖中、張文定公論學、頗矯新建・増城之偏、時則豐學士公、其同心也。世知甬上四大姓、重圭累衰、豐氏與其一、而不知三百年之學統、綿綿延延、豐氏必參其間、嗚呼盛矣。」（「豐學士畫像記」、外編卷一九）

黄宗羲以上に「甬上」に強い愛着をもつ全祖望は、寧波學術史に大きな貢獻を果たした城西豊氏のことを、黄宗羲以上に高く、そして系譜的に評価する。右の引用から、豊氏一族に対する強い敬意の念を読み取ることができるだろう。

さらには、「我が家の藏書は、先侍郎公（8）以来、その大半は城西豊氏のところから鈔写したものである（「予家自先侍郎公藏書、大半鈔之城西豊氏。」「雙韭山房藏書記」、外編卷一七）」というように、全氏一族は城西豊氏の藏書から直接的な恩恵を受けていた。その恩義を、全祖望が感じていなかったはずがない。また、全氏一族の藏書は大半がその後失われてしまうのだが、原因の違いこそあれ、豊坊の代で藏書の多くを失ってしまう豊氏一族の歴史と自らの一族のそれとを重ね合わせていたのかも知れない。「紫清觀蓮花塘記」（外編卷一八）の冒頭で全祖望は、豊稷の人生に関連して「宋代の宰相であつた豊清敏公の故居は桓溪にあつたが、貴顕となつた後には月湖に居住し、その別宅は城西にあつた（宋尚書豐清敏公之故居在桓溪、既貴後在月湖、而其園在城西）」と述べている。ここに出てくる地名は、すべて全祖望にとつてもゆかりのある場所である。「桓溪」は彼の一族の居住地であり、「月湖」には先祖以来の別荘があり、「城西」には彼の先祖の居宅があつて、そこは彼の生誕地でもあつた（後述）。このように豊氏一族は、単なる地元の名家という以上の意味・因縁を、全祖望の中で有していたのである。

もちろん「浙東藏書家、首推天一閣」と述べているように（「西江書屋」、詩集卷一四）、全祖望が天一閣に対する敬意の念を強く抱いていたことは疑えない。その天一閣に登閣できたことは彼自身誇りに感じていただろうし、天一閣の藏書から學術研究の面で具体的な恩恵を被っていたことも事実である。ただ、全祖望自身、天一閣を、どこかで低く見ていた側

面もあつたことは否定できないのではなからうか。全祖望にとつては、范氏よりもより強い愛着と因縁を感じる一族として豊氏があつた。その一族は、宋代以来の長い歴史をもつ名族であつたが、万巻の書に崇られる形で没落してしまつた。そのことを追憶し、記念することは、天一閣や万巻楼という個別具体的な場所の歴史を記録することに止まらず、思想家・全祖望にとつて自らの學術観と直接結びつく重要な案件だつたはずである。狂気を帯びた豊坊の人生に対する次の嘆息を見ると、私はそう考えざるを得ない。

これらはみな、数万巻の書物に崇られたものである。だとしたら、書物を読んで善くない結果を招くことは、逆に、自分のことだけに専念して狭い世界に頑なに閉じこもつてゐる輩が、それでも安穩と何事もなく過してゐることに及ばない、ということになる。私は、この樓閣に登るたび、書物を閲覽するあいまに何度も感嘆せざるを得ない。〔皆此數萬卷書爲之厲也。然則讀書而不善、反不如專己守陋之徒、尚可帖然相安於無事。吾每登是閣、披覽之餘、不禁重有感也。〕天一閣藏書記、外編卷一七

もちろん、全祖望が「專己守陋之徒」(この表現もまた、遠回しに天一閣の運営方針を批判しているように思われる)に与しているはずがない。彼自身が、そして彼が敬愛して止まない黄宗羲(彼もまた「豊南馬別伝」という豊坊の伝記を著している)もまた、半ば狂気じみた思いを抱えつつ「數萬卷書」に自己の一生を捧げたのであつた。現在の成功者である

天一閣を語る際に、必ずと言ってよいほど、今は無き豊氏万巻樓に全祖望が言及するのは、そういう、屈折した自負心のような思いがあつたことだと私は考える。

## 二 二老閣で黄宗羲を継ぐ

ところで、話を明清思想史に限るならば、天一閣よりも重要な蔵書樓が寧波地域にはあつた。それは慈溪の二老閣であり、二老閣の主人は鄭性である。この鄭氏二老閣に関する全祖望の記録を読み解くとき、前節の後半で述べ来たことがらが、より深く了解できる。まずは、鄭性に捧げられた文章から見てみよう。

黄宗羲先生の講学活動において、高弟はみな吾が甬上にいた。再伝して後は、先生の遺された言葉は存分に発揮されないまま消えてしまい、証人書院で学んだ子弟たちは、かつての功業を再び盛んにすることができなかった。(黄幹の弟子である)何基が(金華の地で)朱子学に光沢を加え、(袁燮の弟子の)袁甫、(楊簡の弟子である)錢時と陳埴が陸学に光沢を加えたような事例を探しても見つからないのであるが、慈溪の鄭性先生が最もそれに近いであろうか。(南雷黄氏之講學也、其高弟皆在吾甬上。再傳以來、緒言消歇、證人書院中子弟、不復能振其舊德。求其如北山之有光於朱、蒙齋・融堂・和仲之有光于陸者、吾未之見也、慈水鄭先生南谿其庶幾乎。

「五嶽遊人穿中柱文」、内編卷二一

ここにもまた「甬上」という、場所の名前が現れている。全

祖望の思想を理解する上でこの「甬上」はまぎれもなく鍵概念である。そもそも、どのような形で空間を分節するか、その空間にどのような意味づけを行うかはきわめて政治的な問題であり、地名は価値中立的な用語などではない。学術史の整理が必ずといってよいほど「甬上」との関係性の中で行われていることは、全祖望を理解する上で看過すべき問題ではないと私は考えている。それはともかく、話は二老閣である。

鄭性先生は、黄氏の学問を表彰して余力がなかった。黄氏の居宅が水害と火災に遭った後、書籍が散乱亡失してしまつたが、（鄭先生は）これらを整理し、故城の賈氏が顛倒させてしまつた『明儒学案』の順序についても、誤りを正して重刊した。以前、（黄氏の弟子であつた）御尊父の鄭梁氏が自宅に祠を建てて黄氏を祀ろうとしたけれども果たせなかつた。先生はその志を成就させ、居宅の東側に二老閣を建て、黄氏と（その友人であつた）祖父の鄭濤氏とをお祀りした。春と秋の仲丁の日には少牢のお供え物でお祭りし、黄氏の諸孫および学社で学んだ子弟とを祭りに招いて、香火の絶えることがないようにした。……

もともと、黄氏が亡くなられた際には鄭梁氏に墓誌銘の執筆が依頼されたが、果たされなかつたため、鄭先生は私に委嘱された。四方の学者が、黄氏の学問を探し求めようとする際には黄氏（の後裔）のところには行かずに鶴浦（<sup>9</sup>）（の鄭先生）を訪れた。黄氏の諸孫が（黄氏

の）遺産目録を探し求める際にも、かえつて先生を本家とみなした。「先生於黄氏之學、表章不遺餘力。南雷一水一火之後、卷籍散亂佚失、乃理而出之、故城賈氏顛倒明儒學案之次第、正其誤而重刊之。先是、尊府君高州欲立祠于家以祀南雷而不果、先生成其志、築二老閣於所居東、以祀南雷及王父秦川觀察、春秋仲丁、祭以少牢、黃氏諸孫及同社子弟皆邀之與祭、使知香火之未墜也。……初、南雷之卒也、託志文於高州而未就、至是先生以屬之予。四方學者、或訪求南雷之學、不之黃氏而之鶴浦、即黃氏諸孫訪求簿錄、亦反以先生爲大宗。」／同前

そもそも全祖望にとつて、鄭性は父親の代から縁のある人物で、董秉純編『全謝山年譜』（詹海雲校注本第一冊所収）には、康熙五八（一七一九）年に、当時一五歳の全祖望に鄭性がわざわざ会いに来た（と全祖望の父親に当人が語つた）ことが記されている。乾隆八（一七四三）年、全祖望が三九歳の時に鄭性は亡くなつてゐるが、その後にも、黄宗羲の著述を刊行する仕事を鄭性から引き継ぐべく、全祖望は二老閣を何度も訪れている。そのことは、「私は、鄭性先生の家から黄宗羲先生の草藁を全て引き取り、一つ一つ校訂したが、……惜しむらくは、鄭性先生が既に世を去つておられ、一緒に討論することができないことである（予乃從南谿家盡取先生之草藁、一一證定、……惜乎南谿下世不得與共討論之。『南雷黃子大全集序』、外編卷二五）」といった発言からもうかがえる。全祖望には「仲春仲丁之半浦陪祭黃梨洲先生」という題の詩もあり（詩集卷四）、そこには「その時、（鄭性先

生のご子息は)私に向かつて、黄宗羲先生の『宗元学案』を完成させるよう依頼された(時臨之属予續成先生宋元學案)という原注が付されている。彼における二老閣の存在の大きさがうかがえよう。

ついで、全祖望の「二老閣藏書記」を見てみたい。これもまた、題名に掲げられた二老閣よりも黄宗羲に関する叙述に力点が置かれたものであり、二老閣を語りつつ実は黄宗羲の学問の要点を論述した内容となっている。そこでは、まず、黄宗羲が書物収集に熱心で江南地方の蔵書家をくまなく訪ね廻ったこと、鄭性が二老閣を建立した経緯などが述べられた後、以下のような黄宗羲論が展開される。

私は二老閣を訪問し、再拝して感に堪えず以下のよう  
に考えた。黄宗羲先生の蔵書は、単に博学と多蔵を誇る  
ものではない。明代以来、学術は大いに破壊され……た  
が、先生が登場してからは、義理・象数・名物が統一さ  
れ、さらに理学・気節・文章が統一され、世の学者たち  
に、九流百家を一貫の道へと立ち返らせることができる  
ことを、明らかに知らしめた。だから、先生の蔵書は先  
生の学術の拠り所なのである。……古人で蔵書記を著し  
た者は、書物をためこんで読まないことを戒めとしたに  
過ぎないが、先生は学者に、「書物で心を明らかにすべ  
きで、玩物喪志に陥つてはいけない」と語っており、こ  
れはまさに蔵書の至教である。先生の講学活動は長江以  
南にあまねく及んだが、吾が故郷ほど師承の結実した土  
地はない。(予過之、再拝歎曰、太沖先生之書、非僅以

夸博物、示多藏也。有明以來、學術大壞、……自先生合  
理義象數名物而一之、又合理學氣節文章而一之、使學者  
曠然於九流百家之可以返于一貫。故先生之藏書、先生之  
學術所寄也。……古人記藏書者、不過以蓄書不讀爲戒、  
而先生之語學者、謂當以書明心、不可玩物喪志、是則藏  
書之至教也。先生講學偏于大江之南、而瓣香所注莫如吾  
鄉。「二老閣藏書記」、外編卷一七)

いささか唐突に話題が「吾郷」、つまり寧波へと転じ、この  
後に、ここでは省略したが、鄭梁を含む、寧波黄門の学者た  
ちが列挙されている。いかにも全祖望らしい論旨の展開であ  
る。それはさておき、黄宗羲の学問の基底をなすものとし  
て、長い歴史をかけて蓄積された書籍群「蔵書」が着目され  
ている。もちろん、それには、この文章が「蔵書記」である  
点を加味して考えなければならないが、そのことを差し引い  
ても、これを、全祖望による黄宗羲受容の要諦の一つとみな  
して差し支えないだろう。これは、黄宗羲の学問を論じた言  
葉であるとともに、「吾郷」「甬上」で開花した、新しい理想  
的な学問潮流のことであり、全祖望は自らそれを自覚的に継  
承していくことを、ここ二老閣で宣言しているのである。

これまでに扱った蔵書楼に関する記録は、「記録」という  
言葉がしばしば想定させがちな、「そこにあるものをそのま  
ま写し取る」性質のものではない。これらは、その場所に蓄  
積している歴史や文化の記憶を掘り起こし、その痕跡に共鳴  
し、その喪失を哀惜し、それらの作業を通じて自らが理想と  
する学問のあり方を継承・顕彰しようとする、主観と情熱が

横溢する論文であつた(10)。このような性質の「記録」は、彼の文集中の至るところにある。彼の文章や記録編集作業が後世に与えた影響を鑑みるならば、この点は決して軽視できない。そして、このことを指摘することは、決して全祖望を貶めることにはならないと私は考える。逆に、思想家・全祖望の本領を理解するうえで極めて重要な点なのである。

### 三 同谷三先生書院は何処に？

学問の行われる場所ということでは、「蔵書樓」の他に「書院」もあり、全祖望は、寧波地域の書院に関する文章も多く残している(11)。ところで、書院について考察する際には、以下の点に気をつける必要がある。

考えてみるに、宋代のいわゆる「書院」の多くは、宿儒の講学所であつた。たとえば桃源書院が王説の講学所であつたようなもので、清代の書院が、役人や地方が設立して士人に試験を課すものであつたのとは少しく異なっている。しかし、当時は従学する者が多く、教育の恩恵が及ぶ範囲は後世の書院の比ではなかつた。だから、その形跡を絶滅させてしまふべきではない。また、「書院」と名付けられておらず「居」「齋」「講舍」と呼ばれているところもあれば、後人が先賢を祀るために建立し、その傍の建物で耆儒を招いて教學活動を行うところもあるが、それらはすべて収録した。逆に、名前は「書院」となつていても、実態は私的な読書・蔵書の場所に過ぎないもの、たとえば全氏の「同谷三先生書院」

や史氏の「鄞溪書院」などは、含めなかつた。(案宋時所謂書院多係宿儒講學之所、如桃源書院爲王説講學處、與清代之書院爲長吏或地方設立以課士者略殊。然當時從學者衆、教澤所被迥非後世書院所能波及。故其跡不宜泯滅。亦有不名書院而曰居曰齋曰講舍者、又有後人所建以奉祀先賢而闢其旁舍延耆儒以教授者、今皆錄之。至名爲書院而實爲私人讀書處或藏書室、如全氏之同谷三先生書院・史氏鄞溪書院等則不闕入。)(『民国』鄞縣通志) 與地志「歷代學校書院考略」

鄞県歴代の学校・書院リストに附されたコメント(編集方針)の一端である(12)が、我々にとつて興味深いのは、リストから排除されるべきものとして「全氏之同谷三先生書院」が挙げられている点である。この「同谷三先生書院」に関する記録は、しかし、全祖望の思想史観を考える上で無視できない資料である。その内容をまずは確認してみよう。

冒頭で全祖望は、南宋の乾道淳熙年間以後、朱熹・陸九淵・呂祖謙を祖とする三つの学派が出現したとし、それぞれの特色を簡潔に紹介する。その後、全祖望は、「わが郷の先人には、この三学派のいずれについても、それを継承する人物がいた(吾郷前輩於三家之學、並有傳者)」と語り、議論を、寧波における三学派の継承へと展開させる。

(中でも)陸学系が最も早く(に伝わり)、楊簡・袁燮・沈煥・舒璘(の、いわゆる「淳熙四先生たち」)がそれであり、江右の門人にこれに勝る者はなく、特に楊簡・袁燮は輝かしい功績が非常に多い。その高弟に注目する



に、袁甫を除けば、陳垣が最も優れている。この（陸学の流行の）あとに続くのが王応麟であり、彼は一人で呂学の大本を受け継いでいる。……王応麟の学問の論じ方は、思うに諸学派の手法をあわせ取っているが、その文献を網羅する手法は、実に呂祖謙を手本としており、まして王応麟は幼くして棲昉を師としているので、呂祖謙の学統であることは言うまでもない。朱学（の系譜）は、巴陵の楊岳の学統があるが、その学問を史蒙卿が授かり、そして黄震はさらに独自に（朱学を）遺された書物から受け継いだ。この当時、甬句「寧波」の学者は鼎の支柱のように（三学派が）並び立ち、……隆盛を誇った。（而陸學最先、楊・袁・舒・沈、江右弟子莫之或京、楊・袁尤多昌明之功。顧其大弟子、自袁正肅公而外、陳侍郎習菴其最也。嗣是、則王尚書深寧獨得呂學之大宗。……深寧論學、蓋亦兼取諸家、然其綜羅文獻、實師法東萊、況深寧少師迂齋、則固明紹之傳也。朱學則巴陵楊氏之傳、授之史公蒙卿、而黃提刑東發又別得之遺書中。當是時、甬句學者鼎擲角立、……其亦盛哉。「同谷三先生書院記」、外編卷一六 \* 全祖望の「書院記」はすべて

「外編卷一六」であり、以下は「記」名のみ掲げる。」

南宋思想史を、朱熹、呂祖謙、陸九淵の学統に分けて整理する視点には、さほど新味は感じられないが、「吾郷」寧波にそれらの学統の継承者がすべて揃っていたという指摘は、いかにも全祖望である。この指摘が思想的に成立するか否か、どれぐらい意味のある指摘なのかについては、様々な議

論があり得よう。だが、全祖望にとつてこれは、そうであるべき、そうであったはずの「事実」だったのだろう。それは、事実の捏造と非難すべき事柄ではない。そこには、彼にこのような思想史観を抱かせるのには十分な、非常に濃厚な個人的な体験、場所の記憶があったのである。陳垣・王応麟・黄震を「同谷三先生」と捉える問題構成自体がこのような思想史観を要請するものであり、そのような問題構成を彼に抱かせたのは、「同谷山」という場所と彼自身との親密な関連性であった。

鄭興城の東四十里のところに、同谷山という山がある。その麓には宝幢河が流れ、西は大函山に望み、東は太白山を跨ぎ、水木はあざやかで、四明の景勝の地である。陳垣はここに代々住んだ。王応麟の先祖の墓もここにあり、そのため彼が亡くなると、すぐにここに埋葬された。黄震もまたかつて戦乱を避けて同谷山にやつてきた。その後二百年の時を越えて、先侍郎「全元立」が墓地を（この地に）賜り、その縁でわが家の父子兄弟はこの山中に読書する者が多く、わが祖先には三つの草堂があった。それぞれ瞻雲館、来鶴莊、阿育王山房という。瞻雲館だけが現存しており、亡き父「全書」はかつてその中において、紙を切つて（陳垣・王応麟・黄震の）三先生の位牌を作り、私にそれを祀らせた。そこで私は三先生の書院を改めてつくり、先侍郎をあわせ祀り、そして残りの空間を学舎に当てることを願ひ出た。昔の学問を志す者たちは、必ずその土地の先賢を学舎に祀ったも

のであり、わが家の親子が同様のことをしたのも、またやはり古きよき伝統を守つたためである。「城東之四十里、有同谷山。其麓有寶幢河、左枕大函、右股太白、水木明瑟、四明東道之絶勝也。習菴世居於此。而深寧先壘在焉、故其卒也、即葬於此。東發亦嘗避地其間、踰二百年、而爲先侍郎之賜塋、是以予家父子兄弟多讀書山中者、先世有草堂三、曰瞻雲館、曰來鶴莊、曰阿育王山房。今惟瞻雲無恙、先公嘗於其中剪紙爲三先生神位、令予祀之。予因請改作三先生書院、配之以先侍郎、而以其餘爲學舍。古之學者、必釋奠於其郷之先師、予家父子之爲此、亦猶行古之道也。／同前)

陳垣・王應麟・黃震たちが、この同谷山で具体的な講学活動を展開したわけではない。それぞれ、代々ここに住んでいた、墓がここにあつたり、一時的にここに避難していたりしただけのことである。その彼らが「同谷三先生」という括り方で顕彰されるのは、ひとえに、全祖望の一族がこの地で学問を行つたり、「三先生」を祀つたりした歴史があつたからなのである。「歴代学校書院考略」がそのリストから外したことからも分かるように、いわゆる書院としての実態を備えた「同谷三先生書院」なるものは、存在しなかった。だから、この書院記を、「事実の記録」として利用することはできない。しかし、そのことは実はたいした問題ではない。なぜならば、降り積もる歴史のなかで文化を発酵させんとする知的営為（「行古之道」）が、確かにそこにあつたからである。

だから、われわれは、この「同谷三先生書院記」を逆向きに読んでいくべきなのかも知れない。全祖望にとって、同谷山という場所で先祖代々積み重ねられてきた知的営為、場所との濃密な関わりがあり、その中で、この地と関わりを持つた三人の先人が歴史的に存在したことを強く意識することになった。そして、彼らの学問とその系譜を整理するなかで、全祖望は、南宋思想史の三大潮流がみごとなまでにこの地に注ぎ込んでいることを「発見」したのである。「同谷三先生」という問題構成は、それ故、「南宋思想史」の領域には属さない。これは、南宋思想史の事実の記録ではなく、全氏一族の知的営為を継承・顕彰する記念の論文なのである。繰り返しのなるが、全祖望にはこういう性質の「記録」が数多くあり、それはまさしく「記録」として、後世に伝承され、いまだに影響を与え続けている。このことの意味を、我々は深く認識すべきであろう。

#### 四、「四先生」という構図と城南書院の復興

全祖望が「書院記」という形で記録を残した所謂「書院」のなかには、もちろん「歴代学校書院考略」のリストに載せられているものも多くある。だが、そのような、「書院」として認定されているものに関しても、ここまで私が述べ来たつたことがらが確かに指摘できる。このことについて、まずは「城南書院」から見ていきたい。

城南書院は、袁燮先生の家塾である。四先生の講学堂は、（楊簡先生ゆかりの）慈湖書院が宋代に建てられ、

文及翁氏が書院記を著した。(舒璘先生ゆかりの) 広平書院は元代に建てられ、王応麟氏が書院記を著した。袁燮先生の書院は宋代に建てられたが、書院記は伝わっていない。沈煥先生だけが専用の学塾が無かったが、明代の人がはじめて沈煥先生のために南山書院を建立して、その欠を補った。五百年來、三書院は衰退したもの、まだ存続している。しかし、城南書院の跡だけが廢墟となっていた。私は既に先聖賢人の古蹟を遍くけてあげてきたが、その地も訪れて復興した。(城南書院者、袁正獻公之家塾也。四先生之講堂、慈湖書院建於宋、文參政本心記之。廣平書院建於元、王尚書深潭記之。正獻之書院亦建於宋、而其記不傳。惟沈端憲公無專塾、明人始爲補立南山書院。五百年以來、三書院雖衰、尚有存者、而城南之址獨圯。予既遍舉先賢故蹟、乃訪其地而復之。『城南書院記』)

「四先生」とは、既出の、淳熙年間に寧波地域で活躍した陸九淵思想の継承者たちのことである。全祖望は、盛んに彼らの活動に言及し、顕彰した<sup>(13)</sup>。この「四先生」に関わる講学所の中で「三書院」が曲がりなりにも存続しているのに対し、「城南書院」だけが消失してしまっていた。だから、全祖望が復興したというのである。復興したわけだから、事実として「書院」は存在しており、それゆえ、「城南書院記」は事実の記録である。しかし、記録者は実は当事者であった。「予既遍舉先賢故蹟」とあるように、全祖望は決して書齋に引きこもっているようなタイプの学者ではなかった。彼

はフィールドワーカーであり、実践家であった。そうでなければ、あの時代に、あれだけの史資料を収集することなど不可能だったであろう。そして文献資料だけでなく、寧波地域の歴史文化遺跡の保存に対しても、彼は大きな功績を果たした。これは、全祖望を理解するうえで幾ら強調しても足りないぐらい重要な点である。

だが、「同谷三先生書院記」の時と同根の問題がここにも存する。全祖望自身が非常に深く「城南書院」という場所と関わり、濃厚な記憶をその場所と共有していて、その彼が「城南書院」に関する記録を残している。既に述べたように、当事者が記録者だったのであった。また、本来「袁正獻公之家塾」であったものを、彼が、「四先生之講堂」を全て揃った形で存在させるために「書院」として復興させた点にも留意すべきである。「四先生」という思想史の構図を十全なものにするためにも、ここは、そこにあるべき、無ければならない場所だったのである。嘗て確かにあったものを復興させたわけであるから、事実に戻したことを彼が行ったわけではない。だが、「そこにあるべき、無ければならない」という哀惜と理念に従ってそれを行ったわけであるから、彼は事実以上のものをそこに付け加えたことにはなる。そして、繰り返しになるが、その彼がこの記録を残したのである。

「事実以上のものをそこに付け加えた」という点には補足説明が必要であろう。全祖望は、「城南書院記」の後半で、以下のように述べている。

そもそも宋朝以来、大儒が林立し、その子弟で師の緒

言を守ることができた者はかなりの数に上るが、世代を経てともに大儒となった例は、あまり見かけない。思うに、先にはただ武夷の胡氏のみである。……その後は、ただ袁氏のみが、袁燮先生を輩出して、高官として一時代を築いた。黄震氏は閩学（朱子学）を最も主として修めた人物であるが、袁燮先生については「晩宋に之に先んずる者無し」とみなした。そうであるならば、城南書院の再建は、単に袁氏の学統のみが私物化できるものでもなければ、吾が郷の学統が私物化できるものでもないのである。

城南書院の跡地は、思うに慶暦年間、樓郁先生の講学堂から始まった。当時の学者は樓郁先生を城南先生と呼んだ。樓郁先生が城内の西湖に移り住んだ後は、袁燮先生の高祖である袁叡公が樓郁先生の高弟であった縁でその地において講学を行い、かくして世々そこに住むこととなった。袁燮先生の三人の子（袁喬、袁夬、袁甫）は、袁甫先生が城内の監橋に移り住んだ以外は、ずっと城南に住んでおり、今に至るまでその血筋を嗣ぐ者が存している。書院が完成したので、ただちに袁氏の後人に主宰させた。（且夫有宋以來、大儒林立、其子弟能守其緒言者甚多、而再世並爲大儒、則不概見。蓋前惟武夷胡氏……。其後惟袁氏、實生正肅、冠冕一時。黃提刑東發最主閩學、至於正肅、以爲晚宋無先之者、則書院之建也、微特非袁氏之學統所得而私、抑豈吾鄉之學統所得而私哉。城南之址、蓋始於慶曆中正議樓公之講堂、當時學者

稱爲城南先生。及正議遷居城內西湖、正獻之高祖光祿以高弟講學其地、遂世居焉。正獻三子正肅遷居城內監橋、而其餘仍在城南、至今猶有存者。書院既成、即使袁氏後人司之。／同前

城南書院建設の意義は、袁氏一族だけが独占できるものではないばかりか、「吾が郷」の学統もまたそれを独占できない、普遍的な価値を有するものである。引用文前段でこのように述べ来たつたにも関わらず、後段では、袁氏一族とこの場所との関わりが歴史的に回顧され、書院が完成したからには、「袁氏後人」にそれを主宰させようと語っている。半ば矛盾したような主張であるが、それは、彼自身が、この場所が「袁正獻公之家塾」であったことを自覚していたからである。この場所が普遍的な存在意義を有するという彼の確信が、やや強引な形で「書院」を「復興」させ、この「書院記」を書かせたのである。

さらに、二つの点を追記しておきたい。一つは、城南書院があつた場所についてである。なぜかこの文章には明記されていないのだが、この書院は、西湖（月湖）の「竹洲」付近にあつた。「竹洲」といえば、全祖望には「竹洲三先生書院記」という文章がある。これは、沈煥・沈炳兄弟および呂祖儉の三人が同地で講学活動を行ったことを記念して、全祖望が記したものである。この書院も「歴代学校書院考略」にリストアップされているが、全祖望がこの書院記で「史浩は老年により致仕すると、竹洲の一隅を下賜され、孝宗は「四明洞天」と題した門の扁額を書して与えた。これが、いわゆる

真隱觀である（史忠定王歸老、御賜竹洲一曲、壽皇爲書四明洞天之闕以題之、即所稱真隱觀者也）と述べているように、実質的には、南宋時代に宰相になった史浩の別荘地であった。そして、「竹洲三先生書院記」は、以下の興味深い文章で締めくくられている。

先に先宮詹公が竹洲を手に入れたとき、沈煥先生のために書院を建てようとしたが果たせなかった。その後竹洲はしばしば主人を変えていき、後に私のものとなった。以上、顛末を記しておく。（先宮詹公之得竹洲也、擬爲端憲築書院而未成、其後竹洲屢易主、而後歸於予、乃遂事焉而記之。）

「先宮詹公」こと全天叙（授）とするものもある。字は伯典）は、これまで再三登場してきた全元立の孫、全祖望にとつては高祖父にあたる人物である。全祖望は彼の故宅（竹洲にほど近い月湖西岸にあつた）で誕生した。そして、先祖と因縁深いこの竹洲を手に入れた全祖望は、先祖の念願であつた「書院」を「復興」したわけである。先祖以来の濃密な記憶を有する場所との関わりという点で「同谷三先生書院記」と通底しており、寧波の先人を記念する文章のなかで、全氏一族の歩みがそれとすりあわされている点は興味深い。

追記したい第二の点は、これまで何度か使用してきた「書院の復興」という表現についてである。ここまでの論述から明らかなように、これは、全祖望の活躍によつて実態としての書院が姿をもつて現れたというよりは、全祖望の記録によつて記憶の「再編成／強化」が行われた、と考えたほうが

事実により即しているように思われる。このことを、全祖望が記録を残している「甬東静清書院」と「長春書院」を例にとつて補完したい。この二つの書院はそれぞれ鄭清之と高閑にゆかりのある場所であつたが、全祖望の当時、前者は「蔬圃」に、後者は「庵」に成り果てていた。そこで全祖望はこれらを「復興」するのであるが、ここで注意を要するのは、以下の点である。もともとは鄭清之が棲居を記つたことに端を発する「甬東書院」に関し、寧波地域に朱熹の学統を伝える大きな功績を有しながら歴史的にあまり評価されてこなかった史蒙卿こそが栗主にふさわしいと考えた全祖望は、史蒙卿の号を加えて改称した「甬東静清書院」を「復興」した（「甬東静清書院記」）。また、「長春書院」については、宋末に既に高氏の子孫によつて「功德道場」となつていた同地を、高閑の「正學」を顕彰するために、「ここを書院に改め、高閑先生の祠を祀り、蔣璠も並び祀ることにした（改爲書院、以奉憲敏之祀、而配之以季莊）」（「長春書院記」）のである。蔣璠は、高閑と交遊のあつた人物であるが、彼がこの「長春書院」に祀られるようになったのは、ひとえに、彼と高閑との交遊が寧波學術史において重要であると全祖望が判断したからであつて、彼自身が同地に特別な因縁をもつていたわけではない。これら二つの書院も「歴代学校書院考略」にリストアップされているものであるが、いずれも全祖望の理念・學術史観に従つて文化的記憶が再編され、彼の記録によつてその歴史的意義が強化されていることは、ここまでの検討で明らかであるう。

## 五 おわりに

天一閣・二老閣・同谷三先生書院・城南書院に関する全祖望の記録を紹介しながら、場所の中に歴史と文化とを看取していくこうとする彼の姿勢を確認してきた。彼は非常に真摯に、寧波地域の「ゲニウス・ロキ（土地の霊）」「場所の記憶」を記録し、継承し、顕彰しようと努めた。これは、決して彼だけに見られる営みではないが、彼ほど、前代の歴史を掘り起こし語り継ぎ、後世に参照され得る記録を残した人物も、そうざらにいるものではない。このことの意義は、何度強調しても足りないほどであり、寧波地域の文化風土の多くは彼の記録によって作られているといっても過言では無からう（14）。この点を確認したうえで、しかし問題は、そのような彼の営みが偉大であればあるほど、後世の我々は、彼の記録の特性に意を払う必要が生じてくるということである。全祖望がのこした蔵書楼・書院の記録は、いまあるものをそのまま記し録したというよりは、今あるものの奥にあつてそれを支えている歴史性・理念性を掘り起こし、それを継承・顕彰しようとするものであつた。寧波に対する強烈な「場所愛」がそれを突き進めていた。そして、現代の我々を含む後世の人間は、全祖望のそのような記録特性を帯びた史資料を利用してきたわけである。記録の根底にひそむ記憶と記念とをも理解したうえで利用しないと、いつまでたつても全祖望史観の安易な再生産で終わってしまうことになるだろう。

## 注

- (1) 鈴木博之「場所に聞く、世界の中の記憶」（王国社、二〇〇五年）一三八頁
- (2) 『宋元学案』に対する増補修訂作業から全祖望の思想史観を抽出した研究に、何俊「宋元儒学の再構築と清初の思想史の歴史観——『宋元学案』全氏補本を中心とした考察——」（鈴木弘一郎訳、『中国——社会と文化』第二〇号、二〇〇五年）があり、参考になる。
- (3) イーフォー・トゥアン『トポフィリアー人間と環境』（小野有五・阿部一訳、せりか書房、一九九二年）を参照。
- (4) 「浙東学派」に対する私見については、早坂俊廣「関于『宋元学案』的『浙学』概念——作為話語表象的『永嘉』、『金華』、『和』、『四明』——」（陳輝訳、『浙江大学学报』（人文社会科学版）第三三卷第一期、二〇〇二年）という論文を参照されたい。
- (5) 豊坊（後に名を道生に改める）、字は人翁、別号を南禺外史という。彼については、平岡武夫「古書の幻想と文字の魅惑——豊坊の古書世学」（『経書の伝統』、岩波書店、一九五一年、所収）を参照。また、東京大学出版会から刊行予定の「東アジア海域に漕ぎ出す」シリーズ第二巻『文化都市・寧波』に、城西豊氏に関する近藤一成氏の論考があるので、ぜひ参照された

い。

- (6) 天一閣の蔵書と万巻楼との関係については、虞浩旭

『歴代名人与天一閣』（寧波出版社、二〇〇一年）に考証があり、参考になる。

(7) 煩瑣にわたるため、人名に関する細かい注記は省略する。ここで集中的に論じられている「甬上學統」について詳しく知りたい方は、早坂俊廣・安部力・荒木

龍太郎・久米裕子・黒田秀教「全祖望『書院記』」注（『平成一七年度』二一年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—研究報告書」第三巻、五八七—六三六頁）を参照されたい。本稿は、この共同研究抜きにはあり得なかったものであり、共同研究者の各位に謝意を表したい。なお、この共同研究の起爆剤・導き手となった論文に、佐藤仁「全祖望撰『慶曆五先生書院記』考」（同氏『宋代の春秋学—宋代士大夫の思考世界—』所収、二〇〇七年、研文出版）がある。

(8) 全元立、字は汝德、号は九山、鄞県の人。嘉靖一四（一五三五）年の進士。翰林学士、工部侍郎等を務めた。専權を握っていた嚴嵩と激しく対立したという。彼は、全祖望の六世祖であり、祖望が特に敬慕した祖先の一人である。王永健『全祖望評伝』（南京大学出版社、一九九六年）五一頁を参照。

(9) 鶴浦は半浦ともいい、現在の寧波市半浦鎮のこと。二老閣の所在地（建物は現存せず）。なお、二老閣のみならず、寧波地域の蔵書楼については、略兆平『書

城瑣記』（上海古籍出版社、二〇〇〇年）が参考になる。

(10) 全祖望の学問が「情感に富み、正義に心酔し、故国に対する思い」に満ちている、「内から外へと向かう学問」である点を、既に杜維運氏が「全祖望之史学」（『清代史学与史家』、東大図書公司、一九八四年）において指摘している。

(11) 全祖望の書院記については、注（7）に掲げた研究報告書に全訳が載っているので、参照されたい。ただし、本稿では、訳を一部改変して引用している箇所がある。

(12) 早坂俊廣「寧波における知の営みとその伝統」（『信大史学』第三三号、一一—二〇頁、二〇〇八年）が類似の話題について分析を加えているので、参照されたい。

(13) 「淳熙四先生祠堂碑文」「四先生祠堂碑陰文」（外編卷一四）「奉臨川先生帖子」「答臨川先生問淳熙四君子世系帖子」（同卷四四）などを参照。

(14) ここで仮に「文化風土」と称した事柄については、以下を参照。「人間は、自らの行為をミユトス（筋立て）によって語る生き物である。……ここで注目されるのは、そのような語りをつうじて、語られる事柄が物語へと仕上げられることに加えて、語り合うという行為をつうじて、個々の経験を共同的な経験に接続する空間のシステム、いわば〈物語の空間〉が出来る

がつてゆくということである。ごく簡単にいえば、風土とはそうした物語空間そのものであり、さまざまな主体が行き交いつつ、語る行為を交すことのできる（場所のネットワーク）に他ならない。（木岡伸夫「沈黙と語りのあいだ」、安彦一恵他編『風景の哲学』、ナカニシヤ出版、二〇〇二年、四六―四七頁）。なお、より本格的に展開された議論として、同じく木岡伸夫氏に『風土の論理 地理哲学への道』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）があり、参考になる。

〔付記〕 本論文は、二〇一〇年度と二〇一一年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「清朝中期以降の寧波における文化保存の精神史」（代表…早坂）による成果の一部である。ただし、その着想は、二〇〇五年度と二〇〇九年度科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」（代表…小島毅）内の計画研究「寧波における知の営みとその伝統―学脈・宗族・トポフィリア―」（代表…早坂）に拠る共同研究に端を発し、内容の一部を同特定領域研究主催の「焦点としての寧波・浙江―文化の多層性とその環境―」（二〇〇八年七月二七日、東京大学）で報告している。また、二〇〇九年七月二三日に天一閣博物館で、二〇一一年五月三〇日に浙江大学人文学院で、やはり内容の一部を報告した。その場で有益な助言をくださった方々に対し、ここに謝意を記したい。